風の末裔シリーズ・5th シーズンの6

～六連星・Ⅵ（むつらほし）～

©西風そら

http://nisikaze.sakura.ne.jp

～風出流山（かぜいずるやま）～

荒野を駆ける雪豹(ゆきひょう)の背中なんて勿論乗ったコトないけれど、きっとこんな感じに違いない。

夏草色の馬は、背中の者にそんな想像を抱かせてくれた。

「ヤンー！　大丈夫かー？　あぶぶ！」

真後ろでスリップストリームに入っているユゥジーンの口に、雲中の氷の粒が飛び込んだ。この位置じゃなきゃ、とても着いて行けない。前のヤンはそれどころじゃない筈だ。

「おーい、ヤンー？」

「だ、だいじょぶー！」

「ホントにー？」

「うん、これでも、三峰で毎日乗馬の練習して…うぁっぶぶ」

口は開かない方がいいみたいだ。

ヤンは、脚の下でしなやかな身体を伸び縮みさせる夏草色の馬に、怖さよりも興奮が先に立っていた。

この春までの自分だったら、恐ろしくてとても乗っていられなかっただろう。きっとこの時の為に、僕は岩尾根で毎日、馬に乗る練習をしていたんだ。

夏草色の馬は、ぐんぐん上昇し続けた。耳の奥が錐(キリ)で突かれるみたいにジンジンする。

「まだ上がるの?!」

辛うじて見えていた地上の色も見えなくなって、後は夜明け前の薄暗い雲の中。

「あああっ！」

雲を突き抜けた光景に、寒さも耳の痛みもぶっ飛んだ。

夜とも朝とも着かない澄みきった紺碧の空。そこに、凄い速さで風の帯が流れていた。縦横無尽に。何百本も、何千本も。

それはヤンの類い稀なる優れた目に、遥々(ようよう)と映っていた。

夏草色の馬は、迷う事なく一本の風の帯に飛び込んだ。大昔から通い慣れた道。ユゥジーンも必死で着いて行った。

次の瞬間二頭は、信じられない急加速で、南西へと運ばれて行った。

剣のような頂きが連なる万年雪の山岳地帯。

ひときわ高い独立峰を目指して、二頭の騎馬は風の帯を飛び出して、降下を始めた。

ヤンもユゥジーンも髪にツララを下げてヨレヨレだったが、手綱を握り締める手は緩めていなかった。中腹の広い棚になっ

ている部分に、二騎は雪煙を上げて着地した。
「こ、ここが、風出流山…」
ヤンは周囲を見上げて、ガクガクする唇を開いた。
イフルートがその名前を口にするのを聞いた事はある。まさか自分がその地に立つなんて、思いもしなかった。
見上げるような氷壁が立ちはだかっている。
「ねえ、ユゥジーン、神殿ってどこなんだろう？　……ユゥジーン?!」
いつの間に、隣にいたユゥジーンが消えていた。乗って来た馬もいない。そして周囲の空間は少しずつ灰色に歪んで行った。
「罠に嵌(はま)ったのか？」
ヤンは用心しながら身構えた。
目前の歪みの中に人影が浮かんだ。
「ふん、性懲りもなく！」
マボロシにどんな意地悪を言われようが、自分に自信を持っていれば大丈夫だ、負けるもんか！
「ヤン!!」
しかし予想に反して、霧の中から現れたのは、思いもよらぬ人物だった。
「これもマボロシか…？」
「ううん、正真正銘僕だよ。怪我は塞がってるけど、力が入らないや…、ちょっとフラつく」
「…フウヤ!!」
白い猫毛の少年の、目を開いている顔を見て、ヤンは状況を忘れて、思わず駆け寄った。
「朝方、お姉ちゃんの人形に急に怒鳴られたの。起きなさいって。どうしたのかなって思ったら、ベッドの横がいきなり灰色に歪んで、輪っかみたいな穴が開いたんだ」
「それで…？」
「輪っかの向こうにヤンが見えたの。凄い寒そうな雪の中にいて、心配になって思わず飛び込んだ。そしたらここに来たの」
フウヤは手に掴んでいたストールを、思い出したようにヤンの肩に掛けた。
いきなりな展開に、ヤンの思考は置いて行かれた。フウヤはケロリとし過ぎている。
「ねえ、あの神殿の中へ行けって事なんでしょう？」
「神殿って何処？」
「そこ」
フウヤが指差すと、氷壁だった場所に柱が現れ、見上げるような神殿が音もなく出現した。しかし、全体が灰色のおどろおどろしい歪みに覆われている。

「行こうよ」
手を引くフウヤに、ヤンは足を踏ん張って抵抗した。
「お前…！　本当にフウヤか？　話が旨すぎる！」
「フウヤだよ。何なら、二人しか知らない秘密、聞いてみて」
「マボロシは僕の心を読める。意味ないよ」
「うーん…、じゃあ、ヤンの知らない僕の秘密、話そうか？」
「えっ？」

フウヤは朗々と話し始めた。
「ヤンの頭のバンダナ、珍しい色でしょ？。春の新芽みたいな、透明感のある黄緑。僕、風露の関にいて色んな部族のヒトに会ったけれど、その色を目にしたのは、一生で二回だけなんだ」
「フウヤ？」
いきなり何を話し出すんだろう？　確かにこれは、三峰に古くから伝わる、難しい発酵方法で出す色だ。
「いっぺんは市場でヤンと出会った時。もういっぺんは、その前の日。川柳って部落で、一人だけがその色の布を、川に晒(さら)してた」
「…？？　どういう事？」
「どういう事なんだろね。ただ、僕は、勝手に、色々…色々、想像したんだ。布を晒していた僕を生んだお母さんは、いつ、誰に、その色の染め方を習ったのかなあ…？　とか」
「…フウヤ…」
「それでね、確かめたくってヤンにくっ着いて行ったの」
「……」
「これが僕の秘密だよ、ヤン」
ヤンはマジマジと霧の中の子供を見た。
「分かった、お前は間違いなくフウヤだ」

＊＊＊

「ねえ、どこまで行くの？」
ユゥジーンは鏡みたいな長い氷の廊下を歩いていた。
前を歩くオレンジの瞳の娘が振り向いた。
「私にも分からない。ただ、明け方の砂漠で歌を唄っていたら、目の前に灰色の渦が出現して、向こうにお前が見えたから飛び込んだ。だからこうやって会えたんだろ。だったら、神殿があったら入ってみるのが筋じゃないか？」
「ルウ…、罠かもしれないって思わない？　第一、俺、大長様を助けに来たんだけれど…」
「罠でも何でも、行ってみなきゃ始まんないだろ。全く、及び腰は子供の頃のまんまなんだから。それにしても寒いな、こちとら砂漠育ちなんだから、招待するならちっとは気を遣えってんだ」

「ルウこそ、考えなしの猪突癖は直っていないな」
言いながらもユゥジーンは、マントを外して、砂漠育ちの娘に掛けてやった。
しかし……本当に、まさかまさかだよな…。最初、霧の中でヤンとはぐれて、いきなりルウが現れた時は、渦巻きが見せるマボロシかとも思った。
「何だ？　ジロジロ見て」
「いや…、俺の脳内の生産物だったら、もうちょっと色気を付けてくれたんだろうなあと…」
「何だ?!　それは?!」
二人は喧々(けんけん)言い合いながら、廊下を歩いた。二人の歩く廊下の下を、まるで鏡のように逆さに、フウヤをおぶったヤンが通過したが、お互いに気付かなかった。

廊下の突き当たりに両開きの大扉があった。
「これ、開けるんだよな、やっぱ…」
ユゥジーンが取っ手に手を掛けたが、ルウはここで躊躇した。
この扉は……見覚えがある…。
「どうした、ルウ？　さっきの勢いは?」
「…うん……」
「開けなきゃ、先に進めないぞ」
「うん、そうだな…」
ルウも意を決して、二人で両側から扉を引っ張った。

……・・・・
真っ暗だった。上も下も分からない。
ユゥジーンは、ルウの肘に自分の腕をピッタリ着けた。あまりにあやふやな空間で、今にもはぐれてしまいそうだ。
キィン・・・と、耳鳴りのような音。
〈・・よく来たな・・我が愛すべき末裔達・・・〉
大仰なエコーの掛かった声が響いて、暗闇の奥に一人の男性がポゥッと浮かんだ。水底を通したように歪んで揺れているけれど、目が慣れるに連れ、姿がはっきりする。
青みがかった銀の長髪、金糸の縁かがりの法衣、宗教画から抜け出したみたいな端正な白い顔。
しかし一番に目を引くのは、彼の背中…、頭の上から足元まで伸びる、分厚い立派な翼だった。それが重なって層になっている。一体幾つ羽根をもっているんだ?
〈そなたらを待っていた・・・〉
「…誰…だ?」
ルウは油断なく剣の鞘に手を掛けた。

ユゥジーンも腕を交差させ、二刀を握って身構える。
〈そう気色ばむでない。我も同じ風の民だ。風の民の始祖・・そなたらのずっとずっと祖先だ・・・〉
「……??」
ルウとユゥジーンは顔を見合わせた。
「灰色の神殿にいるって事は、あんたがこの渦巻きの大元なのか?」
〈さて、それはどうだろう・・〉
羽根の男性は微妙に口の端を上げた。
「はぐらかすな!!」
ルウは気色ばんだが、有翼人は無頓着にサラサラと続けた。
〈そんな事よりも・・・我はそなたらを買っているのだ。だから、会って話してみる気になった。そなたらの強さ、勇気、可能性・・それらは我を大いに感動させてくれた・・〉
「だから、何だ? ご褒美に飴玉でもくれるってのか?!」
ルウは斜(はす)に構えた。ネチネチした誉め言葉には裏がある…って、普段からうんざりしている。
〈そうだ、褒美だ。褒美に、良いモノを与えてやろうと思ってな・・・〉
「はん! 褒美だと? ヒトの婚礼を台無しにしておいて、どの口が言うかな?!」
「ルウ、折角何かくれるってんなら、話だけでも聞いとこうよ」
大切な西風の里を襲われたルウには限りなく憎い相手だが、婚礼どころではない事態を引き起こした事に多少有難さを感じているユゥジーンは、ちょっと譲歩した。
〈そうだ、お前は賢い・・・〉

あっと思う間もなく、ユゥジーンの周りに風が巻いて、ルウが消えた。
「ルウ?! ちくしょ!」
一人で慌てる暗闇で、目の前にぼんやり光る物が浮かんだ。
白銀の……一組の羽根?!
〈我の羽根をひとつ、お前にくれてやろう・・・〉
「えっ! えっ? えっ?」
いきなり唐突な話。
「な、何で…?!」
〈我はな、風の民の未来は、頭の堅い大人より、お前達のような柔軟な若者にあると思ったのだ。その羽根は絶対の力をお前にもたらしてくれる。どうだ? 何も出来ずにもどかしかったお前ではなくなるのだ・・・〉
「……!!」
扉を少し開けられると、少年の心はスルスルと持って行かれ

た。未熟で半人前の自分が、伝説のカワセミ長みたいに、何でも出来る存在になれる?!

ルウシェルの目の前の闇にも、一組の羽根が浮かんでいた。

〈この羽根があれば、お前は里で絶対者になれる。もう、古い老人どもに悩まされずに済むのだ・・・〉

「……私は、力づくの権力なんか欲しくない」

〈綺麗事を並べるだけなら簡単だ。だが、お前が羽根を背負う事によって、救える者がどれだけいる? 病の母親、護られるばかりの二人の若者、ひ弱い里の未来。掛け換えのない大切な者達を、絶対に護れる強い存在となれるのだ・・・〉

「……」

ルウは目を見開いて、眼前のゆらゆら揺れる羽根を見据えた。

そう…、羽根を背負っても、自分の中身が変わらなければ、それでいいんじゃないか? 確実に母者の肩の荷を下ろしてあげられる、里を護れる強さも手に入る…。

〈さあ、我は風の民の祖として、そなたらの将来を応援したいだけなのだ。見返りは要求しない。安心してその羽根を手に取るがよい・・・〉

二人の手が少しづつ上がり、羽根に触れようとした。

「やめろ――――!!」

空間を切り裂いて、大長の闘牙の馬が飛び込んで来た。しかし、そこはもう、誰もいない暗闇だった。

「ああ――、るう!、ゆぅじん!」

大長の前に乗ったリリが、小さな悲鳴を上げた。

「叔父上…!」

ナーガの深緑の馬が、別方向から空間を渡って来た。

「二人は、羽根を…、羽根を、受け取ってしまったのですか?!」

「いえ、私の接近に気付いた有翼人が、一瞬早く二人を連れ去ったのです」

「また手の届かない所へ?」

「まったくイタチごっこです。しかし、アレの目的が、子供達だったとは…」

二人は唇を噛み締めた。

「正面から闘うとどちらかが滅ぶ。それはあちらも本意ではないのでしょう。だから我々を迷路に封じ込め、闘わずして勝つ方法を取るつもりなんですよ」

「弱い子供達を利用するなんて…」

「弱くない! とおさま!」

リリが叫んだ。

「るうも、ゆぅじんも、弱くない! 子供だけれど…強い!」

「うん…そうだな」
ナーガは、口をギュッと結ぶ娘を、正面から見て頷(うなず)いた。三人、真っ暗な上空の一点を見上げる。
「信じよう…、あの子達を……」
＊＊＊
ユゥジーンとルウは、それぞれの灰色の空間で、茫然と羽根に手を伸ばそうとしていた。
「役立てる者になれる…」
「強き者になれる…」
不意に、二人を覆う灰色の壁の外を、白い何かが過った。
「?!」
それはうっすらにしか見えないが、強い術で封じられた空間の外を、闇雲に飛び回っては弾かれている。
ルウの胸のピンクの石が小さく震えた。
「シ、シンリィ?!」
ちぃっ!! と忌々しそうな声がして、地面から鋭い氷の槍が、筍のように伸びた。白い影は、槍によって遥か上空へ追い立てられて姿を消した。
「…シンリィ…」
二人の伸びていた手は下ろされていた。
〈どうした? 早く、羽根を取れ・・・〉
エコーの声が、少し早口で響いた。
「俺、いいです」
ユゥジーンは首をゆっくり横に降った。
「羽根ってそんな軽いモンじゃない。シンリィ見てて、そう思ってたんだった」
「危うく、転ぶ所だった…」
ルウも自分の右手を見つめながら言った。
「羽根は頼る物じゃないって、シンリィが教えてくれていたというのに」
〈・・・!!・・・〉
暗闇に、明らかな苛立ちを感じた。次の瞬間、二人の足元が割れて崩れた。
「破邪――!!」
大長とナーガのダブルの呪文が炸裂し、分厚い氷壁に風穴が空いた。
「道が出来ました!」
大長がぜえぜえ言いながら顔を上げた。幾重もの呪文で閉ざされたトラップを、やっと突破したのだ。
「はあ、ふう…、やりましたね」
ナーガはもっと息が上がっている。さっきから堂々巡りの迷

宮をぐるぐる回らされ、ありったけの力を使わされた。術の力はあるけれど、持久力に欠けるのが彼の泣き所だ。
「もうトラップは通用しませんからね、次は実弾が来ますよ、経験上」
「じつだん？」
大長の疲れた顔を初めて見るリリが、不安そうに聞いた。
「いろいろ飛んで来たり、襲って来たりって事です」
「……」
「リリはここで待ちなさい」
ナーガがきっぱりと言った。
「イヤだ！」
娘は獅子みたいな頭をブンブン振った。
「しんりぃも、みんなも、闘ってるのに！」
「リリ、その為に…そういう時の為に、私達は修練して、力を付けているのですよ」
いつもはフヨフヨと甘い大長が、打って変わって真剣な顔をしている。本当のホントに、逆らえないって事だ。
「あたし……あたし……」
綾取りとかやってる間に、もっともっと、術の練習をすればよかった。じじさまも、かわせみさんも、教えてくれるヒトは一杯いたのに…。

リリは後悔の涙をポロポロこぼした。ちょっと習っただけで空間に穴を開けたり、しんりぃの助けを出来たり…。自分がそれなりに呪文を使える者だというのは、早くに分かっていた。もっとちゃんと修練すれば、皆を助けられる自分になれていたという事も。
「リリ…」
ナーガが下馬して、闘牙の馬に近寄り、リリを抱き下ろした。
「一杯泣いておきなさい。それを踏み台に出来る勇気が、リリにはちゃんとあるもんな」
「とおさま!!」
紫の前髪が、ナーガの懐にしがみ付いた。
「あたしの力、とおさまにあげる。みんなあげる！　持って行って！」
「リリ、そんな事…」
大長が言う前に、ナーガがリリの手を取ってしゃがんだ。
「うん、じゃあ頼むよ」
「はい、とおさま！」
リリは真剣に父の額に手を当てた。ナーガは口の中で小さく呪文を唱え、ちょっとしてから目を開けて、ニッコリ笑った。
「うん、ばっちり力が回復した。これで何が来ても負けない。有難う、リリ」

「うん、とおさま、気を付けてね…」

立ち尽くすリリを後にして、大長もナーガも何も言わずに、ひたすら馬を駆った。あの娘が知るのは、ずっとずっと後だ。魔力をやり取りする呪文なんてないって事を…。

前方に邪気が渦巻き、異次元の魔性の凶暴な気配がビンビンする。

「久し振りですねえ、ナナ」

「修業時代を思い出します、叔父上」

二人は剣を抜いた。

リリは一人、灰色の空間でひたすら祈っていた。

じじさま、とおさま、みんな…、どうか無事でいて！

「あれ？」

目の前に、パサリと何かが落ちて来た。

羽根だ…？　シンリィの羽根とは違う、芯の太い、灰色の立派な風切り羽根。吸い寄せられるように拾い上げた。

・・コンニチハ・・・・

えっ?!　羽根が喋った?

・・ジットミテ・・ジット・・・・

「……?-?」

何かおかしい？　羽根から目が離せなくなっちゃった？

どうしたんだろう……？

＊＊＊

「ねえ、重いでしょ。僕、歩けるよ」

先の見えない氷の廊下を歩くヤンの背中で、フウヤはさっきから三度同じ事を言った。

「フウヤみたいなやせっぽちの重さなんか感じるもんか」

ヤンはフウヤを背負い直しながら、三度目の同じ答えをした。

「それよか、これからどんなおっかない事が起こるか分かんないんだから。体力は温存しとかなきゃ」

「うん…」

「しっかし、長い廊下だな、…あれっ？」

灰色の廊下の先が、今、いきなり開けた。

さっきまでは無かった大きな広間が見え、中心に誰かいる?。

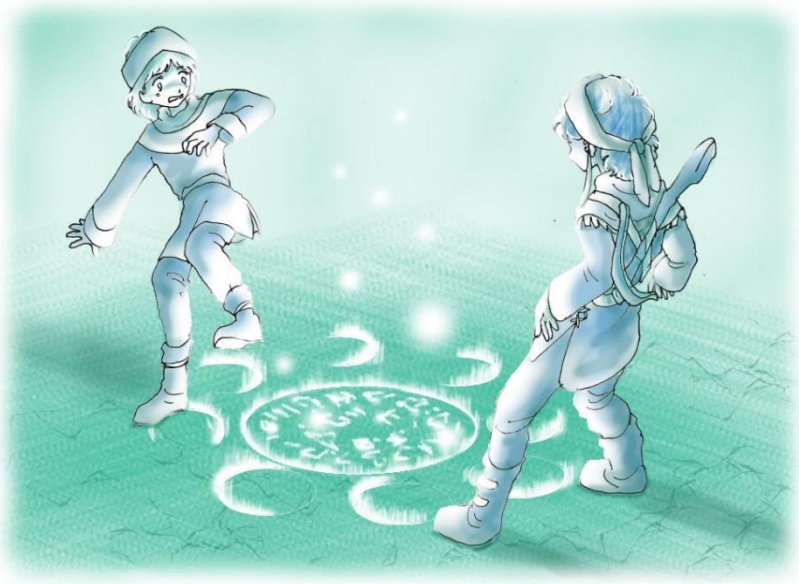
ぼうっと光って地面から少し浮いているのは、青みがかった銀の髪の有翼人だ。

「凄い羽根…」

フウヤがヤンの背中から下りながら呟いた。頭の上から足元まで、何重にも色の違う羽根が重なって、何だか大層だ。

〈よく来たね。心強き平凡な民よ・・・〉

褒めているのか見下しているのか分からない台詞に迎えられた。とにかく凄いエコーの掛かり具合。
「あなた、誰？」
ヤンはわんわん言うエコーに眉をしかめながら聞いた。
〈お前達に協力を頼みたいのだ・・・〉
そのヒトはヤンの質問には答えず、片手を上げた。真上の天井が明るくなって、鏡のような映像が映った。
深い氷の裂け目の中に、何かが見える。人影が二人…？
「ユ、ユゥジーン!!」
「ルウ!!」
ヤンとフウヤが我を忘れた悲鳴を上げた。
二人の大切なトモダチが、氷の隙間に宙吊りになっているのだ。両手足ダラリとして、ピクリとも動かない。
〈二人とも、手の届かぬクレバスの奥深くに落ちてしまったのだ・・・〉
「そ、そんな…！」
「た、助けてよ！　何とか！」
二人の慌て振りと裏腹に、エコーの声は腹が立つ程まったり響いた。
〈慌てるな。だからお前達を呼んだのだ。お前達ならあの二人を助けられる・・・〉
「ホント？」
「うん、僕ならあの隙間に入って行ける。早く案内して！」
銀の有翼人は、フウヤの言う事はまたもや無視して、二人の前の床を指差した。灰色の地面に、いきなり何かが浮き出た。
魔法文字で描かれた太陽のマーク。焚き火の残り火みたいにチロチロ瞬(またた)いている。
〈二人、その標の上に立ち、助けたい相手を守りたいと、強く念じるのだ・・・〉
「そ、それだけでいいの？」
ヤンは拍子抜けした感じで、急いで太陽に歩み寄った。
「待って！　ヤン！」
フウヤが鋭い声を上げた。
「簡単過ぎる。僕達、魔法も使えないのに。何かリスクがあるんじゃないの?!」
〈・・・聡い子供・・・〉
有翼人は、殆ど色の無い瞳を細めて、フウヤの顔を強く見据えた。
〈その通りだ…と言ったらどうする？　トモダチを救うのを辞めるか？　あの砂漠の娘に氷の中は命取りだ。一刻を争うぞ・・・〉



「…!!」
二人は忌々しげに有翼人を睨み付けた。
「フウヤ、ルウだけでも早く助けなくっちゃ。僕、行くから、見届けてくれ」
ヤンは太陽に足を踏み入れようとした。
「待って！」
フウヤが再びヤンの手を握って引っ張った。
駄目だ！　あの銀髪の下の、瞳の奥のほくそ笑みっぷり！
きっと思うツボなんだ。考えろ…考えるんだ……！

「…ねえ」
フウヤが有翼人に向かって一歩踏み出し、冷静を繕って両手の平を上に向けた。
「よく考えたら、僕らが無理して助ける必要ないんだ。だって、蒼の一族の大長さんやナーガさんが来ているんでしょう？　あのヒト達なら、術を使って難なく助けられるんじゃないの？」
有翼人は目に狡猾な光を潜ませながら答えた。
〈無理だな、我の結界があ奴らに破れるものか・・・〉
「大長さん達を足止めしているの？　じゃあ、貴方の目的はルウ達を助ける事じゃないんだね」
〈・・・・・・・〉

「…貴方、本当は何がしたいの？」
フウヤは話の主導を掴んで有翼人を睨み付けた。
「僕にやらせたい事があるんなら、素直に言ってよ。乗ってあげてもいいよ。その代わり、あの二人を今すぐ救って。逆に、あの二人がどうにかなったら、金輪際、僕の協力は得られないと思って」
うわあ、出た！　フウヤお得意の怖いモノ知らず発言。ヤンはヒヤヒヤしながら、隣で肩をそびやかす白い子供を見た。
銀の有翼人は少しの間黙ったが、やがて、ちょっと口の端を上げた。
〈お前には、あの二人では駄目なようだな。では、これではどうか？・・・〉
「えっ？」
有翼人は口を少し開いて不気味な呪文を唱えた。口の中が墨のように真っ黒で、それを見てしまったヤンは、吐き気がする程ゾッとした。
今度は二人の左の壁が明るくなって透けてきた。
数十歩先に、紫の髪の女の子が見えた。腰を屈めて足元から何かを拾っている。ヤンには見覚えがあった。西風の上空で、シンリィと白い馬に乗っていた子だ…？

＊＊＊

「リリ!!」
フウヤの我を忘れた悲鳴が、ヤンの思考を中断させた。
「何で！　何でお前がここにいるんだ?!」
いつも冷静に心の内を見せないフウヤが、明らかに取り乱して、氷の壁に駆け寄って張り付いた。
女の子はこちらに気付く様子がなく、手に持った灰色の羽根に気を取られている。近くに見えるけれど、きっと声の届かない遠い場所の映像を見せているんだ。
有翼人は心中獲たりの表情で、更に口の中で何か唱えた。
女の子の後方に、気配も立てず巨大な影が現れる。ヤンは背筋が粟立った。
ナイフみたいな鉤爪(かぎづめ)を持った、灰色の獣！　それが値踏みするように首を傾げながら、ゆっくり女の子に近付く。リリは全く気付かず、羽根を見つめて俯いたままだ。
「リ、リリ――!!」
フウヤは絶叫して壁を拳で叩いた。
ヤンは声も出ない。こんなフウヤ初めてだ。何も言わず粛々と自分の命さえ投げ出すフウヤが……。
〈救いたいか？・・・〉
高揚した声が後ろから響いた。
〈今ならまだ救えるぞ。お前がその標に立ち、魂を身体から解

き放って、あの者の護りの羽根になってやれば・・・〉
ヤンの心臓が口から飛び出すかと思うくらい大きくうねった。
羽根の真実…!!　ノスリさんが内緒にしていた事！
シンリィの羽根…、カワセミさんの羽根…、あのヒト達は、何てモノを背負っていたんだ?!

「…マモリの、ハネ…!!」
フウヤが目を血走らせて振り向いた。
とても助からないと思った高さから落ちたシンリィが無傷だった事が、頭の中にフラッシュバックした。
口を大きく開けたまま、もつれる足で標に向けて走る。そのフウヤを、ヤンが抱きついて止めた。
「離してえ!!」
もがくフウヤを右手で抱えたまま、左手の指を加えた。
――ピィィ――――!!
〈愚かな。近くに見えるが、壁を隔てた彼方の空間だ。聞こえるものか・・・〉
有翼人に嘲笑されたが、ヤンは更に息を吸い込んで、渾身の指笛を吹いた。
――ピュ――――ィィ――――――――――
その音が空間を貫いたように感じた。

事実、壁の向こうの女の子はハッと顔を上げた。そしてすぐ側に迫っていた灰色の獣にようやく気付いた。
何故?って聞かれてもヤンには答えられない。ただ、自分の指笛は、どんな障害物をも越えて、必要なヒトに届ける自信があった。
リリは冷静に獣の目を見て後退りしながら、ポケットに手を入れ、握った拳を抜き出した。向こうの音は聞こえないが、ヤンとフウヤは獣の情けない悲鳴を聞いた気がした。
唐辛子の粉を思いっきり目に浴びせられてもがき苦しむ獣の脇を走り抜けたリリは、水の波紋の穴を開けて別の空間へ逃げて行った。

「リリ…」
フウヤの心臓は、ヤンの腕の中で、まだ早鐘を打っている。
「砂漠で、シンリィと一緒にいた子だ。フウヤの知り合いか?」
「うん…姪っ子…」
フウヤは言葉少なに答えた。大切なお姉ちゃんの、大切なリリ…。
「フウヤ、砂漠であの子は立派に闘っていたよ。しっかりしているみたいだし、大丈夫だよ」
「リリ…！　駄目だ、あの子、大きく見えるけれど、まだ四つ

なんだ。僕が、守らなきゃ…」
　フウヤはまたフラフラと太陽の標に近寄ろうとした。その肩を、ヤンは再度引き戻す。
「落ち着いて！　どうしてもリリに羽根が必要になったら、僕が標に立つから！」
「え？　ヤンは…リリに、会った事すらないのに？」
「だからだよ。よく知った大好きなヒトを犠牲にして背負うって、どんな気持ちか考えろ。きっと、ずっとずっと眠れない夜を送るんだぞ。フウヤはリリにそんな思いをさせたいのか？」
「…!!」
　そうだ…、羽根になるってそういう事なんだ。
　羽根を背負うって……そういう事なんだ……。

　フウヤの目に焦点が戻った。ヤンの腕の中で有翼人をキッと睨み上げる。
「それが、貴方の目的だったの？　リリや、ルウや、ユゥジーンに、そんな思いをさせるのが」
〈どんな思いだ？・・・〉
　黙って二人のやり取りを聞いていた有翼人は、背中の翼をゆっくり開きながら言った。
〈我が最初に貰った羽根は、死に行く曾祖父だった。暖かく偉大な羽根だった。我らはそうやって、大切な者を護り護られながら、世代を積み重ねて来たのだ。祖先の崇高な愛に包まれて、何がいけない？・・・〉
　声に感情が伴うと共に、大仰なエコーは小さくなり、このヒトの本当の声音がやっと聞こえて来た。
〈何故、封印されねばならない？　何故、忌まれねばならない？・・・〉
　有翼人の憤怒の指先が天井に向いた。
〈お前達が救いたくないのなら、クレバスは閉じてやろう。友人を凍氷の底に見捨てた後悔を、生涯背負うがよい・・・〉
　二人の子供は慌てふためくか？　と思いきや、口をあんぐり開けて天井を眺めている。有翼人も上を見上げて驚いた。氷の隙間に宙吊りになっていた二人がいないのだ。
　リリに気を取られて、ヤン達も有翼人も全く気付かない内に、二人は忽然と消えていた。

＊＊＊

「ルウ、しっかり」
「しっかりしてる。している…つもりだ…」
　氷のクレバスを登る、凍えたルウとユゥジーン。
　どの位気を失っていたのか、意識の遠くでヤンの指笛を聞いた気がして呼び戻された。

身体が芯まで冷えきっている。西風の妖精は寒さに弱い。ルウの衰弱の仕方は洒落になっていなかった。早くこの氷の裂け目を脱け出さなくては。
「あっ…！」
ルウのかじかんだ足が氷を踏み外した。咄嗟に伸ばしたユゥジーンの手が間に合った。
「大丈夫？」
「ああ、すまない…」
「…ルウ！」
ユゥジーンは引き返してルウの下に潜った。
「俺が背負う」
「そんな情けない事、出来るか…」
「黙って！」
ユゥジーンは無理矢理ルウを持ち上げた。
「恥ずかしいとか言っててルウがどうにかなったら、俺一生後悔するから、気の済むようにさせてくれないか？」
「……仕様がないな…」
西風の娘はぐったりした手足をユゥジーンに預けた。本当はもう限界だった。
「もうちょっと隙間が広くなれば風が使えるからな、ルウ」
密着した身体にドキドキするどころじゃない。ルウの身体は本当に冷えきって石のようだった。
「…ん……」
「寝るなよ！　余計に体温下がるぞ」
「じゃあ…何か、……話して…」
「何かって…」
「何でもいい……」
ユゥジーンはちょっと考えてから口を開いた。
「……あのさ、ルウ、婚礼の儀式の時…」
「…うん…」
「ソラの差し出した手に着いて行ったけれど」
「……うん…」
「差し出したのが俺の手でも握ってくれた？」
「……くぅ…」
「だから、寝るなよぉ～!!」
不意に、ドン！　と振動があった。
すわ、落石か?!　ルウを庇って身構えたが、逆に周囲の氷の塊がメキメキと音を立てて左右に開いた。
「……?!」
「見ぃつけた」

遥か上方、二人の髪の長い妖精が、逆光の中覗き込んでいる。
次の瞬間二人は風に掬われて引っ張り上げられた。
「大丈夫か？　ユゥジーン」
「ナーガ様、大長様…！」
「ルウシェルを寄越して下さい」
大長は自分のマントを外してルウをくるみ、呪文を唱えだした。落ち着いたユゥジーンがよく見ると、二人とも生傷だらけでボロボロだ。特にナーガは蒼白で、今にも倒れそうにグラグラしている。
「あの…大長様…」
「はい？」
「お、俺、大長様の助けに…な・ろ・う・と…。スミマセン、こんな体たらくで…」
「十分助けになれましたよ。有翼のご先祖と渡り合って、その姿で戻ってくれました」
大長はルウの後れ毛を優しく払いながら言った。

「……羽根…」
ルウが目を覚ました。
「ルウシェル、どこか痛くないですか？　手足は動きますか？」
「大長…！　あれでよかったのか？　ご先祖がくれた羽根を拒否っちまった。あれで…よかったのか？」
大長とナーガは一瞬表情を止めてから、静かに頷いた。
「なら、シンリィの羽根は何なんだ？　あの子は、罪を背負っているのか？」
「…罪じゃありません」
大長はすうっと言った。
「あれはね、シンリィのお母さんです」
「…!!」
ユゥジーンもルウも唾を呑み込んだ。
ナーガも目を見開いたが、黙っていた。
「自分の命賭して、シンリィとその父親を、黒死病の縁から引き戻したんです。誰もそれに対して何も言えません」
「……そう…か……」
羽根が重くて転んでばかりいた幼いシンリィを思い出しながら、ルウは噛み締めるように呟いた。
「だから、何もかも受け入れていたんだな……シンリィ」
ユゥジーンも黙って理解した。では、ノスリ長の奥方は誰かの羽根になる為に命を絶とうとしたんだ。そしてノスリ長はそれを一生の戒めにして口を閉ざしている。二度と誰にもそんな気を起こさせぬように。
「じゃあ、さっき俺達に差し出された羽根は？」

「元は、庇護の心に溢れた、どこかの誰かだったのでしょうね」
大長は心底苦い顔をした。
「護りたいという純粋な気持ち…、けしてやり取りしてよいモノではない筈です」
「……」
そんな物に頼って、目指していた自分になんてなれる訳ない。よかった、受け取らないで……ホントに…。
それぞれの想いを噛み締めている二人の横で、大長は伏し目でナーガを見た。きつく口止めしていた自分が喋ってしまった事への謝意。しかし、ナーガも理解していた。羽根を拒否した二人が『ちゃんと知る』のは、自然の流れだろう。この二人はまかり間違っても誰かの羽根になろうとはすまい。

「ああ――!!　じじさまぁ!!」
静寂を破って、黄色い悲鳴が響いた。天井に丸窓が開いて、紫の女の子がヤマアラシみたいに丸まって降って来た。
「リリ!」
ヘロヘロの筈のナーガが、一番素早く動いて受け止めた。
「ああっ!!　来たぁあ!!」
リリの開けた小さな窓を突き破って、目を真っ赤にした、怒りの灰色の獣が飛び出した。ついでに細々(こまごま)した魔性共もくっ付いて来た。
「そんな、大所帯で来なくても…」
大長がうんざりした顔で立ち上がり、剣をひと振りした。油断していた魔物達は、術に縛られて動きが止まった。多少の時間稼ぎにはなる。
「俺も闘います!」
二刀を抜こうとするユゥジーンをナーガが制した。
「君はルウとリリを護れ。そして、先へ進め」
「えっ?」
「どうやら、この先へ行くべきなのは、君達だ」
大長は剣を構え直しながら、横目でナーガを見た。物事の流れを見据える目は、自分より妹に、そしてその息子のナーガに色濃く受け継がれている。
「リリ!」
「はい、とおさま!」
「心を鎮めて行き先を探れ。お前には出来る」
「は…はい!」
「さあ、行け!」

リリの作った波紋の穴に、ルウを抱えたユゥジーンも飛び込んだ。その穴が閉じるのを見届けてから、ナーガも抜刀して大

長と並んだ。
「貴方は後衛でいいですよ。ユゥジーン達を探すのに、血を使い過ぎています」
「…行けます」
ナーガの剣は輝きを失くしていた。もう破邪を使う力は残っていない。大長の術が解けた魔性どもが、身を怒らせて向かって来る。
「貴方には無事に戻って貰わないと…」
「僕が倒れたら、もう一度長をやって下さい」
「二度とご免被ります」

突然、ナーガの剣に輝きが戻った。
「えっ…?」
二人の背後に誰かが立つ。懐かしい、暖かい、気配……。

～緋の羽根～

「僕達は金輪際あんたの思い通りにはならない！　リリやルウ達にこれ以上何かしたら、あんたに飛び掛かってその羽根みんなむしってやる!!」
銀の有翼人と対峙して、フウヤは半キレ気味に胸のナイフを抜いて構えた。横のヤンは、リリを見てから我を忘れたフウヤがちょっと心配だった。
〈…どうもせぬわ・・・〉
有翼人は呆気ない程脱力して、投げやりに言った。
〈どうして羽根の素晴らしさが解らぬ？　掛け替えのない者をあらゆる災厄から護れるのだぞ・・・〉
有翼人はフィッと消えて、フウヤの耳元に現れた。
〈想像するのだ。お前の大切なあの娘を、美しい羽根になったお前が護り、共に生きる姿を。他の者のどんな愛よりも深く、あの娘を護れるのだ・・・〉
「や・め・ろ…!!」
フウヤは瞳をたぎらせてナイフを振り回した。
「汚らわしい事を言うな!!」
有翼人はフウヤの横から消え、再び元の所に現れた。そして広げた自分の羽根を撫でた。
〈何故汚らわしい？　何故そのように忌む？　お前達の側にもいるではないか。あの緋の羽根の子供も、汚らわしいのか？・・・〉
フウヤもヤンも戸惑った。そう…、ではシンリィは、どうやって羽根を得たんだろう？

――「羽根は…、羽根その物は、忌む物ではない！」――

力強い声がした。
ヤンとフウヤを百万倍元気付けてくれる、西風の娘の声。
「ルウ――!!」
「羽根に依存し支配された心こそ、忌むべき物なんだ!」
水の波紋の丸窓が天井に現れ、オレンジの瞳の娘が飛び出した。続いてコバルトブルーのユゥジーン、そして紫のリリ。
「ヤン! フウヤ! 待たせたな!」
「ヤッホー、ふーや兄ちゃん! あんたが、やん? さっきの指笛スゴイ! ありがと!」
飛び降りながら、ルウとユゥジーンは空中で剣を抜いて、高く掲げた。
「――破邪――!!」
一度囚われかけた羽根の誘惑に打ち勝った二人の呪文は、今までより格段に強い。強風が灰色の澱みを押しやり、辺りは翡翠色の光に満ちた。ヤンとフウヤにまとわりついていた泥みたいな灰色も流されて行く。
「ユゥジーン! ルウ! 無事だったんだね!」
「リリ…このバカ! なんだってこんな危ない所に!」
地上に降り立った三人に、ヤンとフウヤが駆け寄った。
灰色の歪みは消え失せ、そこは現実味のある、古い石造りの大ホールに変貌していた。床の太陽のマークは変わらない。
「あれ? あのヒト、どこ行ったの?!」
銀の有翼人は姿を消していた。代わりに、ホールの正面奥に古びた巨大な石像が立っていた。顔も、重なった羽根も、さっきのヒトとまったく同じ。大昔に亡くなったヒトの、強い、強い、残留想念……。
五人は太陽の標の周囲に立って、石像を見上げた。
大長やナーガ、ノスリが、頑なに黙して、語らなかった禁忌。
――自分の命を使ってヒトに護りを与える方法がある――
こんなに便利で恐ろしい事はない…。
〈我は、与えてやろうとしただけだ・・・〉
今一度、有翼人の声が響いて、五人はビクッとなった。声の出所は巨大な石像の内部…想念の塊。
〈お前達の本来持つべきモノ。神に近付ける護りの羽根・・・〉
「羽根は、神に近付く為に持つモンじゃない」
ルウが抑えた声で言った。
「あんたは世界中をあんたと同じ考えにしたかっただけだ!」
ユゥジーンが拳をギュッと握って石像を見上げた。
「俺達を有翼人にして、羽根の存在をみんなに教えて、羽根が崇め奉られる世界を作りたかったんだ」

〈何故それが悪い？　平凡な民には、導く者が必要だ・・・〉
「平凡な民は欲だけの心にした方が支配しやすかったの？　とんだお山の大将だね」
　リリを見て落ち着いたフウヤは、いつもの口調を取り戻している。

〈逆だ！　民が我を呼んだのだ！　民が羽根を求める心が、灰色の渦を生み、我の封印を解いたのだ！・・・〉
　石像は声のエコーを倍にした。
「えっ?!」
　五人は狐につままれた顔をした。
「この灰色の渦巻きって、あんたが作ったんじゃないのか？」
　ユゥジーンの問いに、石像は居住まいを正した声で答えた。
〈我にこれを作り出す力があれば、長年こんな所に封じ込まれてはおらなんだ・・・〉
「……」
〈たった一人、羽根が野に降りただけで、大地に種が蒔かれた。それが芽吹いて地に満ちて、我に力を与えた。そう、いつの世も神のエネルギーは、民の『求める心』なのだ・・・〉
「…!!」
「し、しんりぃ？　違うでしょ？」
　リリは不安気に皆を見回した。
　そう、シンリィじゃない。彼の生まれる前…。他の四人は、脳裏にその一人の顔を過(よぎ)らせ絶句した。全ての流れが見えて来た。あまり知りたくなかった事実。
「あのヒトは、そんなつもりなかった。ただ、皆を助けようと、病気の防ぎ方を伝布して回っただけだ！」
　ユゥジーンが言い返す横で、ヤンは真っ青で俯(うつむ)いていた。その後どうなったか、彼が一番知っている。病気を跳ね返す羽根を羨ましがり、神のえこひいきだなどと不満を持ち、皆が自ら欲の心を育てたのだ。
〈平穏に暮らしている時なれば『それ』を見ても欲しいとは思わぬ。しかし抗えぬ災厄が来た時、平凡な民は『気付く』・・・〉
　大長達が口を閉ざしていた『もう一つの理由』が分かった。それを言ってしまうと、水色の妖精はこの世界に居場所を無くする。

〈我は最初に得た小さな力で、灰色の流れの中に、己を映す鏡をばら撒いた。ただそれだけだ。誰の心も操ってはいない。寧ろ、民に問うたのだ。今の世にも神は必要か？　と。後は、知っての通りだ。皆の欲望が小さな雫を大河にし、無限のエネルギーとして我に返してくれたのだ・・・〉

灰色のどろどろが、また部屋の周囲に染み出していた。五人の足元も、だんだんに侵されて行く。
〈ヒトの本能はそうなのだ。昔から変わらぬ、本質的に。・・・欲しがる！ 欲しがる！ 欲しがるのだ！・・・〉

「そうじゃないヒト達だって…いるモン……」
フウヤが呟いたが、小さい声だった。尊敬していた大好きなヒトも、本当にあっけなくそちら側に行ってしまった…。
〈濁流に呑まれた平凡な民は、奪い争い、大地を枯渇させようとしている。やはり神は必要だった。今こそ有翼の民が神の力持て、野に降りるのだ。手の届かぬ強大な存在のみが、民に安堵を与え、欲望を制御させる事が出来る・・・〉
悔しいけれど……事実、地上はこのヒトの言う通りになっている。皆、言い返す言葉を見失っていた。

「違う!!　ちゃんと立ち直れる!!」
それまで寡黙だったヤンが、彼とは思えない大声で叫んだ。そして隣のフウヤの手を握り、石像に向かって突き出した。
「ヒトの心はそんな情けないモンじゃない!!」
この白い子供が身を持って自分に与えてくれた、揺るぎない自信。当のフウヤは、普段控え目なヤンの豹変に、目を白黒させている。
「過去の盲執」
ルウがピシリと言った。
「過去にしがみ着いて同じ過ちを繰り返そうとしている化石に、未来は作れない！　羽根に頼ったお前が野に降りたって、絶対に何も出来やしない!!」
石像はオレンジの瞳の娘をギロリと見据えた。
〈お前の部落を落とせれば、早かったのにな・・・〉
「私が許さない！　何度でも、何度でも、退けてやる!!」
ルウは両側の仲間を見やって、一言一言、自分の胸にも刻むように続けた。
「欲に躓(つまず)いてもいい。遠回りしてもいいんだ。信じてくれる仲間がいるから立ち上がれる。強大な存在におもねるんじゃない。自分達で間違いに気付いてやり直すんだ。それが未来へ向くって事だ！」
四人の仲間は、黙って口を結んでルウを見ている。
「私は西風のルウシェル。私が神を崇めるとしたら、こんな素晴らしい仲間をくれた、運命の神だ！」

不意に、空気が震えた。皆、一斉にルウシェルの胸元を見る。胸のピンクの石が、今まさに光を放って震えているのだ。

＊＊＊

――パアァァァ――ン――

天井の氷が割れて、翡翠色の光の帯が差した。

「…!!」

皆、一斉にそちらを見上げて顔を輝かせた。

砕けた氷がダイヤモンドダストのように舞い、白蓬の馬がスローモーションで降りて来る。逆光の中、馬上に花が開くように羽根が広がる。

「天翔馬(てんま)みたい……」

リリがぽつりと呟いた。

緋色の羽根が馬からふさりと飛び降りた。バサバサで野放図だが、石像の立派な翼よりずっと美しく見える…千切(ちぎ)っては分け与えて来た羽根…。

その羽根の持ち主を、五人は両手を伸ばして受け止めた。全然変わっていない、無防備にほけらっと見開いた、はなだ色の瞳…。でも皆には分かっていた。それが皆を信頼しきった究極の表情だってコト。

「しんりぃっ」

「シンリィ…!」

「シンリィ!!」

「シンリーィ!!」

「…シンリィ・ファ……!!」

そうして六人が手を取り合って、心を繋いだその真下は、チロチロ瞬(またた)く太陽の標だった。

羽根を生み出す大元…欲望の象徴……。

・・・これは、いらない・・・・

六人の心が一斉に唱えた。

〈なに?・・・〉

石像にしたら、静かな中の一瞬の出来事だった。彼は、子供達が言葉を要しないのを知らなかったのだ。

翡翠色の光が地上から滝のように立ち上がった。

〈な・・!!　ななにおおおぉぉ・・・・?!!!〉

予想外の事態だ。石像は声に威厳を持たせる余裕もなくした。床が盛り上がってひび割れ、太陽の印は粉々に吹っ飛んだ。六人も外側にひっくり返った。

〈あああああ!!　何て事を!!・・・〉

破壊は太陽だけに留まらず、床に放射状にヒビを走らせ、壁から天井にも達した。ホールに地鳴りが響いた。細かい振動がだんだんに大きくなる。

六人はそれぞれを助け起こしながら、唖然と周囲を眺めた。自分達が、やった事…?

今の言葉で、止まっていた部屋の時間が一気に流れ出したのだ。柱も装飾も、みるみる風化してボロボロと崩れて行った。石像の羽根にも、無数の亀裂が入っていた。
〈何を、何を壊したか分かっているのだろうな!!・・・〉
「分かんない、何?」
フウヤが大真面目に聞いた。
〈愚か者!! 偉大な…偉大な、風の民の始祖の遺産・・・〉
石像は身体中にヒビが入り、声を発する度に重そうな翼は崩れ落ちて行く。
「神さまになんてちっとも近くないじゃん。自分達で造った仕掛けが壊れちゃったらおしまいなんて」
風の子孫でもないフウヤは遠慮無しだ。
〈この、無知で無価値な凡民が!・・・〉
「そんな事…、そんな事言っているから、こんな事になっちゃうんだ…!」
ルウが切なそうに叫んだ。他人を見下げ、頑なな考えにしがみついて滅ぶのは、けして他人事ではない。
石像の首に音を立てて亀裂が入った。
崩れる…!!
皆が後退りする中、シンリィが一人ほてほてと前に進み出た。
「シンリィ、危ない!」
「シン…!!…」
シンリィは深いはなだ色の瞳で有翼人の像をじっと見上げた。それから羽根を広げて両手で掴み、翼ごと上に差し出した。
〈・・・・・なんの・つもり・・だ?・・・〉
「羽根を、くれてやるって」
ルウがゆっくり言った。
〈・・・・・・・〉
「シンリィには、敵も味方も、良いも悪いも、何も無い。ただ、与えるだけ…」
皆、黙って引き返して、シンリィの横に立った。
〈・・・・・・・・〉
「受け取れば?」
リリが言った。
「あんたがあたし達のご先祖様なら、滅ぼされちゃったら、コトワリをハズスんだよ!」
「うん」
ヤンも言った。
「間違っても、やり直せばいいんでしょう?」
〈我は、考えを改めたりはせぬ。神殿に封印されていた年月は、

それほど軽いモノではない・・・〉
「いいです、それで」
ユゥジーンが言った。
「保守的な大人と突っ走る子供がいて、世の中上手く回るんだって」
「やったらやりっぱなしかよ」
フウヤが口の片端をちょっと上げた。
「責任持って、世界のこれからを見届けたら?」
「まあ、突っ張ってろ」
ルウが腕組みした。
「年寄りは頑固な方が張り合い甲斐がある」

皆、シンリィと共に石像を真っ直ぐ見上げた。石像は表情を緩めたように見えた。
〈・・・片羽根だけ、貰って置こう・・・〉
「え?」
いきなり石像から銀の光が伸びて、シンリィを包んだ。強い輝きの中、緋の羽毛が散らばるのが見えた。
〈地上に羽根を遺して置く。そなたらが今の考えを違えた時、我はいつでも戻って来る・・・〉
次の瞬間、石像の首が折れた。

「わああっ!」
崩れる瓦礫から逃れながら、皆、折れた首から銀の渦巻きが飛び出し、散った羽根を吸い込んで、中天高く飛び去るのを見た。

「ひっでえぇ。崩れるなら崩れるって言ってくれればいいのに」
ユゥジーンが瓦礫の中から立ち上がった。身体の下にルウを庇っている。
「最後まで、上から目線の、陰険なおっさんだったな」
そのルウの下にはシンリィが庇われていた。二人で引っ張り出したシンリィは、右の羽根がなくなり、肩甲骨の上が火傷みたいにひきつれていた。
「うわっ痛そ〜」
フウヤが覗き込んだ。
「シンリィ、大丈夫か? 生きてるか?」
ヤンも心配そうに駆け寄った。
シンリィは自力で立ち上がったが、背負っていたモノが片方無くなったんだ。身体を真っ直ぐ保てないでフラフラしている。
「両方持ってってくれた方がよかったのにねぇ」
フウヤが呑気に言ったが、ルウとユゥジーンは口をキュッと結んでいた。羽根によって命を助けられたシンリィが、羽根を

無くすとどうなるか……想像付かない。有翼人がそれを思ん謀ってくれたのかは分からない。

「ああ〜〜!!　誰もあたしを心配してくれなぁい!!」

髪をぐしゃぐしゃにしたリリが、瓦礫の中からズボッと立ち上がった。

「お前は空が落ちて来ても大丈夫だよ」

フウヤが言って、リリが瓦礫を投げ付け、みんな笑った。

＊＊＊

「ゆぅじん！　これ！」

リリはお守り袋を首から外して、ユゥジーンに渡した。

「長かったね…やっと返せた」

片羽根なくしてまっすぐ歩けないシンリィと、病み上がりでフラフラなフウヤを白蓬に乗せ、皆で灰色の廊下を引き返した。

右側をヤンとユゥジーンが歩き、左側をリリとルウシェルが歩いた。

「ねえ、風の妖精のみんなはともかく、なんで僕とかフウヤとか、ここに居るんだろうね？」

「ヤンとフウヤだからだよ。俺はちっとも『なんで？』って思わないよ」

この二人の『平凡な民』が、有翼人の驚異であったのは確かだろう。

リリは一人元気にツーステップでポンポン跳び跳ねていた。一寸前、泣きべそをかいた気配は微塵も見せない。

「じじさまと、とおさま、凄かったんだよ。群がる怪獣を、エイヤー!!　トリャアー!!　って。カッコよかったァー！」

「そうか、ナーガも頑張ったんだな」

「あ、そういえば、るうって昔、かあさまと、とおさまのハートを争ったんでしょ?!」

馬の向こうでユゥジーンとヤンがひっくり返りそうになっている。

「だっ誰が、そんな事を?!」

「かあさま。凄い強敵で、自分が勝てるなんて思わなかったって」

「無い!!　そんな事実は断じて無い!!　フウリの奴！　幼い娘になんて話しているんだ?!」

「お姉ちゃん、天然だから…」

馬上のフウヤが言い、また皆笑った。

限りない安堵感に包まれていた。

なんたってシンリィがいる。特に話をするでもなく、シンリィはそこに居るだけで、皆を安心な気持ちにしてくれるのだった。そういうのを平和っていうのかもしれない。

有翼のあのヒトは退いてくれた。これ以上『意地悪なマボロシ』が現れる事はないだろう。渦巻きに喰われたヒト達だって、時間をかければきっと心を取り戻せる。三峰の皆みたいに。
簡単な事ではないけれど、この仲間達と一緒なら、何でも出来そうな気がした。

廊下のどん詰まりに出た。ここで異界の歪みは途切れ、トンネルの向こうに神殿の出口と爽やかな朝の空が見えた。
「元の世界だ！」
ユゥジーンが小走りになった。
しかし、シンリィは馬を停止させて下馬した。
「降りるの？」
フウヤも倣(なら)って素直に降りた。シンリィは白蓬の手綱をリリに押し付けて、三、四歩後退りした。
「へ？　何？　シンリィ」
「どしたの？　シンリィ、行こうよ」
「もう灰色の歪みと闘わなくていいから、歪みの内側にいる必要ないんでしょ？」
ヤンとフウヤが両方から手を取ろうとしたが、何故だか近くにいる筈のシンリィに手が届かなかった。
「あれ？　あれれ？」
「シンリィ?!」
異変に気付いたルウとユゥジーンも駆け寄ろうとしたが、そこにいるシンリィに、全然近付けない。いつの間に、辺りの灰色は縮むように彼の周囲だけに集まっている。少年はすぅっと手を回して波紋の丸窓を作った。
白蓬がいなないた。
「しんりぃ！　ばかあ！　しろよもぎ、どーすんのよ?!　あたしは世話なんかしないからね！」
リリが叫んだが、少年は目を少ししばたいただけだった。
「シンリィ！　シンリィ！　白蓬は生涯共にするんじゃなかったのか?!　なんでそんな、今生の別れみたいに?!」
ルウが両手を伸ばして叫んだ。やっと逢えたのに。やっと砂漠の夕陽を見せてやれると思ったのに！　為す術もない涙が頬を伝った。

「歪んだ空間を封印する為だ」
ルウの肩に手を置いて、後ろから水色の妖精がズイと前に出た。
「お師さん!!」
「カワセミさん!!」
「シンリィが！」

「ピーチクうるさい！」
カワセミは結界を蹴散らせながら大股で歩き、難なくシンリィの手首を掴んだ。
「タッチ交代だ、シンリィ」
言うが早いか、掴んだ手首をブンと回して、反動で片羽根の子供を丸窓の外へ放り出した。吹っ飛んで来たシンリィを皆で受け止めた。
「カワセミ様、どういう事ですか？」
「ヒヨコども、トサカ位は生えたか？」
「カワセミさん！」
「この水底の空間は、完全に閉じちまわなくちゃならない。そもそも通じ合っちゃいけない世界だったんだ。だからこんなに歪んでいるんだ…、分かるだろ？」
「……」
「『あっちの世界』との入り口はな、あっち側からしか開かないし、閉じられない。封印も然り。封印するには、あっち側に誰か残らなきゃならない」
「そ、そんな!!」
「そういう事だ、シンリィを頼む。アデュース」
そっぽを向くカワセミを最後に、水の輪は呆気なく閉じた。
「お師さん!!」
「カワセミさん!!」
「あ・あ・あ・・・・」
茫然としていたシンリィが、やっと反応して、閉じた空間に駆け寄った。
「シンリィ…」
ルウは掛ける言葉を持たず、少年に後ろから抱き付いた。
途端、いきなりグワッと開いた目の前の丸窓から、凄い勢いでカワセミが吹っ飛んで来た。シンリィはカワセミのふくらはぎで鼻を打ち、ルウはシンリィの後頭部で顎を打った。
「あいたたたた」
「・・あぅう・・」
「何があった？　お師さん？」
再び大きく開いた丸窓に、白い羽根の見知った女性が怖い顔に腕組みして仁王立ちしていた。
「まったく、何があでゅーすですか？　貴方はまだまだ、まだまだ、やる事があるでしょう。楽隠居決め込むなんて、十億光年早いです！」
「ナーガの母者!!」
「ふぇっ?!」
「ひぇ?」

「はあっ？」
「…ばばさま？」
「ばばさまは止めときましょうね、可愛いリリや」
　女性は急にコロッと優しい笑顔になった。
「元々は、ここの封印はワタシの役割なのです。ワタシの力が及ばなくて、貴方方の助けを借りる事となってしまいました。本当に感謝していますよ」
「狼さんがそっちの鍵の閉め人になるって?!　そんな事許したら、大長に怒られる!!」
　カワセミが急に駄々っ子みたいな声で叫んで一同を『え？』って顔にさせた。

「私ならここにいますよ」
　丸窓の向こうの横から、ヒョイと大長が顔を出した。
「大長!!」
「この子がどーしてもこっちに残るって言うからね、付き合ってあげる事にしました」
「大長ぁ……」
「そんな声出さないで、カワセミ。私を誰だと思っているんです？　その内、そっちと行き来出来る道を、チャチャッと見付けちゃいますよ」
「……・・・」
「貴方と旅したこの何年か、一生で一番愉しかったですよ」
「・・・・・・・」

　向こう側の二人はそれ以上は余計に喋らず、絵のように丸窓に収まって、皆をじっと見つめた。目に焼きつけるように。
　いつの間に、子供達の後ろにナーガが立っていた。こちらも言葉は発せず、ただ二人を真正面からじっと見つめて、そして、最後に一礼した。
　そうして幻灯機が消えるように丸窓は閉じた。

～朱の月～

　雪の原に足跡を連ねて二つの騎馬が行く。
「そろそろだろ？、フウヤ」
　ヤンがイフルートの地図を広げた。今度はちゃんと許可を得て借りて来た物だ。
「あ、あれ！　あの山の間の谷だよ！」
　秋からかなり背の伸びたフウヤが、弾んだ声で指差した。
　身体にピッタリのセーターは、ヤンのバンダナと同じ黄緑色だ。糸玉婦人が染めてくれた。

冬の間、狩猟はちょっとお休みになる。冬を生き抜く強い獣を狩ってしまうと、山が活力を失うからだ。
それで二人は旅に出たいと願い出た。今の歪んだ世の中で、自分達に大きい事が出来るとは思わない。ただ出会ったひとつひとつに心を尽くせば、ちょっとづつ何かは変えて行けると確信していた。沢山のヒトが、出来事が、それを教えてくれた。二人なら何に出会っても乗り越えられると思った。
イフルートは目を細めて許してくれた。
幾つもの塔のそそり立つ谷に二人が到着したのは、冬空が微かに夕色に染まる頃だった。一際高い塔から一つの音が流れ、一拍置いて沢山の音がそれに重なった。
「よかった。『音合わせ』、ヤンに聞かせたかったんだ」
「うん…」
ヤンは谷に満ちる音が見えているかのように目を細めた。
「フウヤはこの音を聞いて育ったんだね」
二人はしばらく目を閉じて、音を心に沁み込ませた。
「寄ってく？　フウヤ」
「うーん……いいや。僕、三峰の民だから。お姉ちゃんに会う事は出来ないと思う。そしたら皆、気を使うし」
「……」
「平気だよ。ちゃんと居場所があるもん、僕には」
神殿から帰る馬上で、ヤンはそっとフウヤに問うた。
「それでフウヤは、三峰に来た目的は果たせたのかい？」
「ん・んん～・・果たせたような、果たせなかったような……でも、もういいんだ」
「…？」
「誰がお父さんとか、決めなくていい。三峰の皆がお父さんお母さんで、僕を育んでくれる。そんな風に考える事にした」
「そうか…うん、そうだね」
谷の岩に並んで座る二人の耳に、二胡の音が聞こえて来た。
「お姉ちゃんだ！　そうか、義兄様の来る日だった」
「ナーガさん？」
「うん、下の子は男の子だったのかな、女の子だったのかな…」
冷えた岩の上で、フウヤは背中を丸めた。
「なあ、フウヤ」
「うん？」
「三峰の皆がお父さんお母さんって言ったじゃない」
「うん…」
「それなら、僕は、フウヤの、お兄ちゃんになれるかな…」
フウヤはちょっと目を丸くしてから、その目をしばたいて、

山陵に顔を見せた朱色の月を見上げた。
「うん、お・に・い・ちゃん・・・」
＊＊＊
二胡の弓を止めて、ナーガは立ち上がった。戸口まで歩いて表に顔を出す。
「あっ…」
外の壁に、紫の前髪の娘がもたれていた。
「やあ、リリ」
「とおさま、こんばんは」
ナーガは外に出て、娘の隣に立った。あんなに早かった背の伸びがピタリと止まってしまったこの子は、これからはきっとユユみたいにのんびり成長して行くんだろう。
山陵から昇ったばかりの月が真っ赤だ。
「綺麗だね」
「うん、教えてあげようと思ったけど、演奏も綺麗だったから」
「そう、ありがとう……ほら、これでもっとよく見える」
ナーガはいきなり屈んで、小さな娘を肩車した。
「きゃっ!、い、いいわよぉ」
「肩車出来る時期なんか、ほんのちょっとなんだから」
「もぉ…」
慣れない肩車に両手を泳がせる娘の手を、ナーガの大きな手がしっかり掴んだ。部屋の中ではフウリも二胡を置いて、生まれたばかりの赤子に乳を含ませている。
「あたしね…、あたし、蒼の里に行くのが嫌だったの。ここに残って楽器作りになりたかったの」
「うん、そうか…、リリがどうしてもそうしたいのなら…」
「ううん、そう思っていたのはこの間まで。今は違うの」
リリはちょっとかしこまって、言葉を手繰りながら続けた。
「あのね、えっと…、力が強くてエライヒトって、独りで立っていなくちゃいけないから、大変じゃない。そういうヒトに必要とされるあたしに、なれるかなあ…って」
「ほんと?!　嬉しいよ、リリ」
「違うよ！　自意識カジョウだなあ、とおさまは。まぁ…、とおさまもだけれど、この世界のそういうヒト、みぃんなひっくるめてだよ」
「大長殿やカワセミ殿?」
「じじさま達もだわね、あと、あのヒト」
「…?」
「意地悪な石像さん」
「……」
「きっと凄く寂しかったんだよ、あのヒト……」

＊＊＊

「ここまでいいぞ」

ルウを西風の里の手前の三日月湖の森まで送って来たのは、ユゥジーンだった。何だかあの神殿まで飛んだひと飛びで、ユゥジーンの馬は高空飛行を覚えてしまった。慣れで覚えるタイプだったのだ。

「西風の里まで送らなくていいの？」

「ああ、ソラが迎えに来てくれるから」

二人は馬を降りて湖の岸に歩いた。

「ここからすべてが始まったんだ…」

六年前のあの時みたいに、朱の月のムーンロードが出来ている。頭上にいつかの六連星(むつらほし)。

今なら分かる。あの時シンリィは、星を指したのではなく、未来に六つの光が輝く事を、教えてくれたんだ。

ルウは灌木の一つに屈んだ。その木だけ清しい香りがする。

「シンリィを忘れないように、あの時ここに植えたんだ」

六年前、ナーガに貰った蜜柑の苗木。

「…!!　ユゥジーン、見てくれ!!」

「何？」

「実がなってる！　こんな小さいの、ほら、一個だけ！」

ルウは手を伸ばしてゴツゴツした小さい実をもいだ。

「ふうん、こんな実、初めて見たかも」

不思議そうに眺めるユゥジーンに、ルウはそれを差し出した。

「ナーガに持って帰ってやってくれ」

「え？　うん…」

「泣く程この実が好きなんだ、あのおっさん」

「…そなの？」

「次、来た時は、砂漠に沈む夕陽を見せてやる」

「うん、楽しみにしてるよ」

「じゃあな」

ユゥジーンは風を掴まえて上昇した。ルウはきっと始まりのあの湖で一人、色々想いを馳せたりこれからの事を考えたりしたかったんだろう。

また自分の中のルウを大幅に上書きした。そうやって、想い出の中のルウと現実のルウとを追い駆けっこさせながら、自分もいつしか成長して、恋の一つもするんだろう。

「でも、初恋は、一生に一回きりだ……」

＊＊＊

砂漠の風紋を朱の光がくっきり照らしていた。今宵の風は月光の詩歌をまとっている。

上空から降りて来るモエギを、地上でソラが迎えた。
「冷えます。上衣を」
「ああ、有難う…」
ふと見ると、砂丘の地平に漆黒の騎馬がいた。
「…ああ、では、僕はこれで…」
気を効かせて去りかけるソラの前に、漆黒のハトゥンは立ち塞がった。
「今宵は貴様に用がある」
「え？」
「砂の民の風習を知らぬか？」
「…？」
「花嫁の父親と決闘するんだよ、花婿は」
後ろからモエギの弾んだ声がした。
「はぁっ?!」
振り向くと、オレンジの瞳の女性は、すんごい愉しそうにニコニコしている。まったく……好きだなあ、このヒト達は…。
大昔と同じようにぎったんぎったんにされたソラの頭上で、ハトゥンは笑いながら、一枚の羊皮紙を投げて去って行った。
「ゔ・・ゔ・・何なんです？」
横にしゃがんだモエギがそれを見つめて目を細めた。
「本当に、砂の民の風習を知らないなあ」
「はあ…」
「父親が認めた花婿には、娘の『本当の名前』を渡すんだ」
ソラは跳ね起きた。
自分の胸の上の羊皮紙には、『空から堕っこちた悪魔』とは正反対の、美しい名前が記されていた。
＊＊＊
「下弦の月っていうんでしょうか？」
執務室の窓から外を見やって、シドが呟いた。
「今夜は冷えるな」
大机のノスリが伸びをした。
「エノシラから差し入れだ」
ホルズが、熱い馬乳酒の入ったポットを持って入って来た。三人、おのおのの場所で湯気の立つカップを手にして寛ぐ。いつもの執務室の風景だ。
「エノシラ、寄ってけばいいのに。最近、執務室を避けてるように思えるのは気のせいか？」
ホルズが鋭いのか鈍いのか分からない発言をしてから、サォ教官と将棋(シャタル)の約束があるとか言って出て行った。
ノスリとシドが残る。
「すみません…」

「何だ、どうした?」
「何だか、世界が一大事になる気がして…」
「気がしただけじゃなく、一大事になる所だったんだ」
「心残りのないようにと…」
「うん…」
「コクったんです」
「はあっ?」
「玉砕しました」
「当ったり前だろ! ガッチガチの婚約者がいるっていうのに! ってゆーか、シド…、そうだったのか?!」
「はい…」
「全っ然、気が付かなかった。男でも擬態するんだな」
「ホルズ様には内緒にしていて下さい」
「ああ、分かった。奴とその一味に知られると大事(おおごと)になりそうだからな。しかし…その…気の毒だったな……」
「はい…」
「元気出せよ、若者」
「大丈夫ですよ。ケジメが着きました」
「そうか」

シドは冷めた馬乳酒に口を付け、再び空を見た。

ナーガ様の言った通り、自分の気持ちにケジメが着いた。宛どない気持ちを抱えて蒼の里へ通っていたけれど、執務室もユゥジーンはじめ若者が育って、自分がいなくても十分回るようになって来た。キリを着けて、次のステップに踏み出す時期なんだろう。

今まで諦めて避けていたけれど……砂漠の故郷ときちんと向き合おう。時間が掛かっても、西風の里を、ここみたいに皆が笑える、心豊かな地にしよう。

飴色の肌の青年は密かに決意して、これで最期のこの窓の月を見上げるのだった。

＊＊＊

月明かりに浮かぶハイマツの丘。佇む影が二つ。
「じゃあ、行くぞ」
片方は長い髪の水色の妖精。亡き朋友(とも)の夏草色の馬を駆る。

頷(うなず)いた片方は、緋色の片翼を斜めに閉じた、はなだ色の瞳の少年。浜辺の干からびた白蓬の馬と共に。

最初の親子関係は、閉じた世界の中だった。そこで自分は、最期の日に向かって歩いていた。運命の流れは、もう一度親子をやる時間を与えてくれた。

「子供って不思議だな。子供の力って、凄いよ、ユユ……」

＊＊＊

水底の揺れの中に滲んだ月が見える。

「風流ですねえ…」

大長は寝転がって、朱から蒼に変わる月を眺めている。

向こうの世界の何処かから、ナーガとフウリの二胡が聞こえる。頭の下には、ずっと近くて遠かった、妹の膝があった。

「……実に風流です…」

～おしまい～

二〇一〇・八・一三

あ…
あ
あ
あ
ガラ
ガラ
ガラ
ぐらっ
羽ダー
ぐらっ
あぁ…
ぴ
ぴ
ぴ
ぴ